

精神分析におけるファルスの意味

——少女戦士の剣のシンボリズム

田村 公江

はじめに——「あれもファルス、これもファルス」

①想像の産物としての「ファルスのな物」

まず、『魔法騎士（マジックナイト）・レイアース』^①に登場する三人の少女戦士を紹介しましょう。彼女たちはある使命を帯びて闘っているのですが、彼女たちの剣は彼女たちの心の成長とともに成長します。つまりより長くより強く（より固く）なるのです。のみならず、この剣は平時においては体の一部に仕舞い込まれていて、敵に出会った時つまり臨戦体制になると、ほとぼしるよう出現するのです。ストーリーが進行して少女たちの修行が完成に到ると、少女たち自身が魔神と呼ばれるロボットのような装備（魔神とは、マシーンでありかつ神であるというネーミングでしょうか？）ちなみにこの魔神は少女がその名前を呼

ぶと出現します。また、表題のレイアースとは主人公の乗る魔神の名です。）の中に入って魔神と一体化して戦います。あたかも平時／戦時の転換を身をもって表現するかのよう。

この三人の少女の本当の使命は、ある人物を殺すことであるとかってきまず。どのようにして殺すのでしょうか。三人の剣は三つの光線のように一つに縊り合わされ、「敵」の体を貫通します。ここでは三人の少女の剣があわさったことによってファルスの機能を果たしています。^②

次は、世界の平和と安定を、ただ祈ることによって支えている「柱」と呼ばれている登場人物エメロード姫です。実はこの登場人物が少女戦士たちに殺されるのですが、最初は少女の姿で登場し、三人の少女戦士に貫かれる時には成熟した女性の姿で登場します。エメロード姫の役目は世

世界の平和を祈ること、ただそれだけです。この世界（の安定）はただひとえにエメロード姫の祈りに支えられているのです。祈りに他の要素が入ってきた時、世界は危機に陥ります。世界を支える中心であるというその役割において彼女は「女王」なのですが、女王ではなく「柱」と呼ばれています。この世界の「柱」システムの説明が物語の第二部の主題となっています。

②少女漫画にもあふれている「ファルスのイメージ」

『マジックナイト・レイアース』から、私は、三人の少女、少女たちの剣、少女たちがその中に入る装置（魔神）、世界の柱である姫を取り出しました。この少女漫画は、少女の心の成長をテーマとすると一応言えるでしょう。少女の心の成長過程に、なぜこのようにファルスのイメージがひんばんに登場するのでしょうか。ファルスを振り回すのは少年の特権ではないようです。少年漫画は少年の人格形成ドラマをしばしば誇大妄想的に、世界や宇宙の平和を守るヒーローの活躍として描きます。少女漫画は、少女たちの内面の成熟を、とりわけ成熟に到るまでの心の危機を描きます。『マジックナイト・レイアース』における「世界」の名はセフィロですが、これはセルフから取られたネーミングとも考えられます。少女たちの日常の生活世界は東京であり、彼女たちは東京から異世界セフィロにやって来るのです。つまり内面の世界の危機を救うために日常世

界からしばし逸脱しているのです。少女漫画の中の「戦士もの」（セーラームーンやレイアースなど）は、少女の心の中においてもファルスの要素がこの上なく重要であることを示しています。

③「ファルスのな物」の特徴

想像の産物としての「ファルスのな物」はどのような特徴を持っているのでしょうか。「男性性器」の形態的特徴、生物学的機能、そして男性たちのその器官への独特の愛着から次のような特徴を抜き取ることができます。

- (1) 長く、固く、尖っている。
- (2) 噴射するもの。
- (3) 何かを貫くもの。
- (4) 形態の変化をするもの。↓大/小、硬/軟、在/不在等々、形態変化はプラス/マイナスの記号の切り替わりとして現れる。
- (5) 大事なものの。かわいいもの。

これらの特徴の中から(4)の形態変化という特徴で探すと、「バーバパパ」もファリックだと言えるでしょう。ただしバーバパパの場合、形態変化がプラス/マイナスの切り替わりであることは、ほとんど示されていません。形態変化を引き起こすことそのものの面白さがバーバパパの楽しいキャラクターになっています。幼児のマスターベーション、幼児が思い描く全能感、生産性への全面的肯定がほのぼの

としています。バーバパパというキャラクターにはいささかも攻撃的なところはなく包容力と同時にちよつととぼけた味わいがあります。この絵本はもちろん女兒にもうけています。この発見がこじつけではなさそうだということは、バーバママのイメージを見ればが納得いくのではないのでしょうか。バーバパパが淡いピンクで彩色されているのに対して、バーバママは黒で彩色されています。

もちろん、平時には体の中に仕舞い込まれていて臨戦体制になると噴射されて敵を貫くという(2)、(3)、(4)の特徴を示す例は、アニメにはいくらでもあります。『幽遊白書』の主人公の武器「靈丸」は、指先から発射されます。ちなみに、発射は有限個で、打ち尽くすとしばらく休息しなければ再び打てなくなるという設定です。

(5)の大事なものの、かわいものの例としては、エメロード姫を挙げました。物語世界を支える中心的なかわいい登場人物といえば、『動物のお医者さん』におけるチョビもそうでしょう。チョビはメスですが、チョビ自身の性生活は一切描かれていません。チョビのキャラクターを示すキーワードは「とろい」です。「とろい」ことは、幼さ、無垢につながりますし、なによりも自分の欲望を持たないということ。自分の欲望というものがそもそも希薄である、ほとんどないというのが「とろい」ことです。そして「とろい」チョビに対して誰もが世話をしてやりたくなく

るのです。「とろい」チョビは人々の心をリラックスさせます。このように考えますと「とろい」ことは「世界のためにだけ祈る」ことと同様の意味であることがわかるでしょう。チョビのところが、作品の物語世界全体を平和に保っています。ちなみに、みんながチョビをかわいがって充足している『動物のお医者さん』においては、なんと、登場人物の誰一人として性愛を帯びてはいないのです。誰も性的に成熟する必要のない世界、読者が奇妙に心癒されるのは、そのせいでしょうか。

(1)、(2)、(3)の特徴を示す例と言えば、ほとんどすべての武器、兵器がファリックです。ピストル、ミサイルは露骨にファリックではないでしょうか。必要な手続きをとれば市民が銃器を持つことができ、(銃による犯罪を嘆きつつも)銃規制に反発する世論の根強い国があると聞きます。おそらく、ファリックな物を所有することへの、激しい愛好があるのでしょうか。

(1)、(2)、(3)の特徴を示す例としてまた、文房具を挙げることもできます。まことに「ペンは剣よりも強し」と言うではありませんか。ペンを使って文字を書く、文章を作る、この行為もファリックであり得ます。ペンからはインクが噴射されます。そして文字の威力は、インクという物質を越えてさらに遠くまで伝わります。もっとも近年この行為はワープロやパソコンによって遂行されています。キーを

「打つ」、マウスを「クリックする」というところにわずかに痕跡としてファリックな要素が認められます。あるいは、物質に由来するイメージが希薄になっていくという言い方もできるでしょう。この延長線上には、まなざしも挙げられるでしょう。「刺すような視線」と言うではありませんか。まなざしは対象につき刺さります。私たちは対象を肉体の暴力で捉え貫き破壊することもできますが、対象への接近をイメージで可能にする様々な手法を持っているのです。

このように見てきますと、私たちは、「男性性器」と「ファルスのな物」の違いがどこにあったのがわかってきます。

つまり、「女性性器」という現実の対象への、「男性性器」の現実の機能が一方にあり、他方には、そのイメージ的類比があるということです。ここには次元の違いがあります。フロイトが「性器的」ということを「性的」ということから区別しようとこだわったのも、そこには次元の違いがあるからでした。もちろん「男性性器」と「ファルス」の間にはなんらかの関連性があります。けれども、「男性性器」が現実の物であるのに対して、「ファルス」はイメージや記号として現れ機能するものなのです。

さて準備は整いました。今日のお話は、ひたすら「ファルス」を主題とします。いたるところに現れるファリック

なイメージと、フェミニズムのキーワードである「男根中心主義 (phallogentrism)」との関係を徹底的に探ってみたい、それが今日の目標です。それもこれもなんのためでしょう？「私は男根中心主義者なんかではありませんよ。」「私の哲学はファルスなんぞというものとは関係ありません。」などと言う、懲りない男たちの首ねっこを、なんとかしてつかんでやりたいからです。

では、簡単に、今日の話の流れを説明しておきましょう。まずフェミニズムの戦略について検討し、次にラカン派精神分析におけるファルスの要点をまとめます。ファルスをめぐる混乱や食い違いを整理し、最後にラカニズムの言い方で男性原理を批判してみましょう。ラカニズムそのものがフェミニズムにどのように貢献できるのかは、実は私自身まだよくわかりません。けれども、懲りない男たちを追いつめて、むしろこちらが彼らを引きずりまわす、そんな楽しいたくらみをめぐらしたいものと思っています。

I フェミニズムの戦略

①単純なファルス中心主義（生物学的性差別主義者）

女性たちはまず、いっしょに話していたらこちらの知性まで曇りかねない蒙昧な性差別主義者たちと闘わなければなりません。不幸なことに、この闘いは今も続いています。彼ら蒙昧なる人々は、生物学的性差によって男性

と女性の価値的差異を根拠付けることができると考えているのです。「女というのかよわくてバカな生き物なのだ。世間の荒波に揉まれるよりも家の中で過ごす方が幸せなのだ」という発言は、少なくとも公共の場ではあり得ないと信じたものです。しかし「女は生物学的に女性であることによって、しかじかの劣った能力や行動パターンを持つ。」という類の発言は、今でも男たちがちよつと油断するとその口をついて出てくるものです。このタイプの性差別主義者は好んで生物学的差異と能力の優劣を因果関係で結び付けようとします。男性の脳は論理的能力に優れ、女性の脳は直観に優れるといった類の脳科学者の研究が、このような蒙昧に侵されていないことを願います。

彼らがこれほど愚かなのは、ひょっとして彼らの生物学的性が生物学的に決定している知的理解力の不足によるのでしょうか。しかし同じ穴のむじなになってはなりません。彼らは、どの程度意図的にかはわかりませんが、単に自分たちが優れているとこじつけたいただけなのです。ここには「私は男性性器を所有している。私は男なのだ。故に私は立派である」という発言しかないので。彼らは生物学的な男性性を賛美し、その生物学的特徴によってプライドを維持しているのです（「男ならしっかりしろ」「ついているんだろ」等々）。「男性性器」を抛り所に「男らしさ」を様々なイメージで織り上げているという意味において、単

純な男根（ファルス）中心主義者と言えるでしょう。「男の沽券にかかわる」とは「男だという証明がついているのだぞ」という強がりです。「大黒柱」、「一本立ちする」等々は、もちろん、「男は男性性器を持っているから一人前なのであり、男性性器を抛り所とするイメージを向上させるべくがんばる、つまり立派なファルスになるべくがんばる存在なのである」ことを表現しています。私はこの種のがんばりを「立派なファルス・ゲーム」とでも名付けたと思います。生物学的男性性器を抛り所として、イメージとしての「立派なファルス」をめざしていくのですから、単純なファルス中心主義者たちの考えによると、このゲームに参加する資格があるのは生物学的男性性器の所持者だけなのです。生物学的男性性器を所持しない者が異となえても、彼らの耳にはほとんど届きません。

②ファルス—ロゴス中心主義

さて「立派なファルス・ゲーム」は様々な領域で展開されます。幼少のころはきわめて素朴に飛ばしっこという形で、次いで肉体的な力の優劣で、そして社会的地位の高低で、金儲けの能力で……もちろん知的領域も例外ではありません。「知は力なり」と言うではありませんか。知的能力はファルスの能力の記号的変換となり得ます。この領域における「立派なファルスになるべくがんばる」ことは、「究極の理性的存在者になるべくがんばる」ことと言えま

しょうか。普遍的価値や真理を発見して論理的構築物をもってそれを巧みに表現することが手柄であります。

要約してみましょう。

・「ファルス」は生物学的男性性器を抛り所とするイメージであり、男性の理想的自己イメージの核となる。

・「ファルス」の記号的変換は様々な領域に及ぶ。知的能力もファルスの能力の記号的変換物となる。知的領域においては「理想的ファルス」は「理性」と呼ばれる。

ファルスを抛り所として「立派な僕」という自己イメージを維持するという構造と、究極的なもの、普遍的なものを抛り所として、理性的活動をするという構造とが、構造として見る限り同じであるところに、ファルス—ロゴス中心主義 (phallogocentrism) という呼び方がびつたりきます。単純なファルス中心主義者に比べると、ファルス—ロゴス中心主義者は、ファルスの記号変換をより進めているのです。

理性的主体、自己同一的な意識主体、あらゆる対象を客観的に見ることのできる超越的な立場……このような主体は、デカルト以降の近代合理主義、近代自然科学の主体であると言えます。問題はこのような主体と、「男性」とが同じ構造で支えられていることです。フェミニズムの運動は、このことを批判しようと努力してきました。直観的には、近代合理主義の主体が、権力構造とりわけ家父長

制度における男性と重なっていることは、よくわかります。実際、女性を差別抑圧し家に閉じ込める家父長たちは近代以降に制度的に確立したのでし、従って近代以降の家父長たちが同時にまた近代的な理性主体でもあったのですから。

また男性たち自身も、一度自分たちの考え方そのものを反省してみれば、近代的合理主義の主体が、「理性的」というその基準に相いれない考え方や表現を、劣ったものとして中心から追い払うものであることに気付くでしょう。たとえば、非ヨーロッパ文化は辺縁に位置付けられますし、人間が生きていることのきめこまかな文脈に沿った柔軟な道徳的反応は、規範の論理的整合性からの逸脱としかみなされません。少しいねいに反省してみれば、男性たちは、「制度」という他人ごとではなく自分自身が、「理性的」でないものを排除していることにも気付くでしょう。つまり、正当—異質という価値付け、中核—辺縁という位置付けを、自分もしていることに気付くでしょう。このような主体の立て方が、成人男性を中核メンバーとして、女性や障害者や老人や子供は、弱者とかお荷物とか呼ばれて、中核メンバーから区別され排除される、そういった社会機構を作っているのではないのでしょうか。

③素朴な反論にどう答えるか。

とはいえ、構造として同じだけれど、なぜ理性とファル

スが同じものといえるのでしょうか。これはやはり困難な問題です。フェミニズムは、西欧の伝統的な哲学が「人間」と言う時、それは「男」ということだったと指摘しました。伝統的な哲学が掲げている普遍的人間という看板は、実は「人間＝男」という前提によって作られたものだったことを、暴こうとしたのです。けれども、この批判は絶えず次のような無理解にあいます。「女性だって理性を持っているではないか」、「そのように批判するフェミニストのあなたは、女性ではあるけれども、まさにあなたが批判している男の語り方、つまり理性的な語り方をしているではないか」等々。この種の無理解に対しては、「わかってないわね」と突っぱねるのが、一番かもしれない。けれども、実を言うと、この素朴な反論にきちんと答えることは、なかなか難しいのです。「理性＝男性」、「男性＝ファルスのなもの」この図式には、やはりまだ説明の抜けているところがあると、言わなければなりません。

フェミニズムの歩みは、一本道ではありません。現状改革という運動ははかどらないのに、理論の上では時として急展開します。こういった事情が、問題をねじれさせています。露骨な迫害や差別が女性に加えられている場所においては、今なお、「女性にも人権を」という運動が必要です。この運動は、女性にも理性が備わっていることを認めさせる戦略によってさらに前進します。「理性ある存在者

には相応の扱いを」、「男性と同じ能力には男性と同じ評価を」といった具合に。

しかし、理性的主体である限りにおいて「名誉男性」に迎えてやろうという男性側からの譲歩が、実は男性化への誘いに過ぎず、女性解放にはならないことがあります。

「名誉男性」に迎えるということは、「立派なファルス・ゲーム」への参加を許すということにはかなりません。参加を許された女性には、今度は男並みに働くことが要求されます。しかし、男並みの働き方は、実は性別役割分業によって可能となっているのです。名誉男性になった女性にとって、子供を生み育てることが困難（ほとんど不可能）になるのは当然ではないでしょうか。残念なことに現状においては、女性の地位向上はこのゲームへの参加によって始まります。かくして、名誉男性となった喜びも束の間、女性は「女性性」という問題に突き当たります。

フェミニズムの運動は、ファルス・ロゴス中心主義批判というスローガンのもとで何を相手に闘っているのでしょうか。女性を袋小路に追い込む「立派なファルス・ゲーム」そのものが標的であることは、言うまでもないでしょう。女性性の可能性を「立派なファルス・ゲーム」の外部に求めようとしているのです。しかし、「女性だって理性を持っているではないか」あるいは「批判するその言葉使用は、男性の言葉使いなのではないか」という一見素朴な

反論を持ち出されると、フェミニズムは言葉使いにつまづいてしまいます。現状批判という当初の目的をしばし離れて、言葉や概念についての整理をした上で返答しなければなりません。

さて、名譽男性化を拒否して、ゲームから降りたとして、女性性の可能性をどのように求めればよいのでしょうか。理性的主体ではない、というところに女性性の可能性を求めるべきでしょうか。非理性的主体の在り方として、脱—中心的人格という捉え方をフェミニズムは提起しました。では、脱—中心的人格とはどのようなものでしょうか。状況にやわらかく反応する繊細な感性、論理と意味の牢獄にとられない詩のような語り口、たとえばそのような可能性もあるでしょう。

ではそのような新しい女性性の可能性は、今まで女性に押しつけられてきたジェンダーと、どのように関係するのでしょうか。理性的主体ではない、ということを男性たちに逆手に取られて、従来のジェンダーに再び閉じ込められることにならないでしょうか。たとえば、再生産労働を改めて女性性にふさわしいものとして、押しつけられることにならないでしょうか。しかし現実生活の差別と闘うには、女性たちはより理性的に、より論理的に闘って、権利を勝ちとっていかねばなりません。かくしてフェミニズムの戦術は混乱し複雑になります。一方では理論上の進展が理性

にとられない女性性の可能性を模索し、他方では現実的闘争が理性を武器とする、そして差別する側が絶えずこうしたねじれを利用する……。この混乱は、いったいどこから始まったのでしょうか。「理性的主体≡男性」というフェミニズムの批判に対する、「女性だって理性を持っているではないか？」という素朴な反論が始まりであったように思われます。

II 精神分析のもとのファルスの意味

精神分析は人間というものの在り方について、いくつかの次元を区別することを試みて来ました。フロイトの局所論（「意識—前意識—無意識」という初期の局所論と「自我—エス—超自我」という後期の局所論がある）は、「私は私である」という自己同一性が、人間というものの在り方の一つの次元に過ぎないことを、初めて明確に示しました。「私は私である」という在り方ではない在り方なんて、あり得るのだろうかと思われられるかもしれませんが、きわめて日常的なありふれた経験の中に、その例を見出すことができます。たとえば、「錯誤行為」に、たとえば「良心」という内面の禁止に。「私」は自分の心の中の働きを全て統合し全て支配しているわけではないのです。「私」が知らない別の働きが、「私」の不意をつくように私の行為に現れます。

「私は私である」という次元とは異なる次元に、私たちはみな、いわば片足を突っ込んでいます。ラカンの仕事は、次元の区別をすること、それぞれの次元の特徴を明らかにすること、そして異なる次元の境目を探究することに向けられていました。今、私たちは、フェミニズムの運動を通じて人間というものの在り方に問いを向けています。ラカンの理論は（ラカンという人があまりにも華々しくトラブルメーカーだったため）、理解される前にある種の影響力を持ってしまいました。ファルスという用語も、ラカンの影響力のもとで普及した感があります。では、フロイトーラカンという流れの精神分析のもとで、ファルスとはどのような意味を持っているのでしょうか。

①ファルスと去勢

まず、ラカニズムにおいてファルスは、去勢という概念とともに理解しなければなりません。つまり、ラカニズムにおけるファルスとは去勢されたファルスということなのです。或いはむしろ、ファルスとは去勢という作用の印なのだと言った方が正確かもしれません。去勢される者と、去勢の作用を被らない者との両方をファルスという記号を使って示すのですから。

しかし「去勢」(castration) という言葉は、ファルスに負けず劣らず人気のない言葉です。男性性器の切断は、人間にというよりは家畜に行われる処置なのですが、男性

をなんとなく落ち着かない不愉快な気持ちにさせるようです。フロイトがエディプス・コンプレクスとともに男性の去勢不安の理論を示したことに対して、あからさまに不快を表明する男性もいれば、「去勢不安なんて考えたこともない」ときっぱり否定する男性もいます。私たちは、そのような男性の抵抗を前にして、フロイトの去勢理論を逐一展開しなければならぬのでしょうか。残念なことに、エディプス・コンプレクスの話でさえ大仕事と言わねばなりません。そこで、ここでは、しばしば見受けられる誤解を封鎖するという戦術をとりましょう。

まず何よりも避けたいのは、エディプス・コンプレクスを一種の家族神話として理解する、そのような矮小化です。たしかに、母への愛着、それを禁止する父への殺意、去勢の威嚇によって母への愛着を断念するように導かれるという一連のエディプス物語を聞かされたなら、人はうんざりするでしょう。「お母さんと寝たいなんていっぺんも（と強調して言う）思ったことはありません」「父とは常に良好な関係を持ってきました。父から威嚇された覚えはありません」このような反応が返ってくるのがオチなのです、そのような反応にどう応えても議論は空転するばかりでしょう。実は、エディプスの物語は神話には違いありませんが、キリスト教における原罪の神話と同じ水準にあるのです。エディプスと聞くと耳を塞ぐ人に対しては、このよ

うな説明の方が受け入れやすいようです。原罪というものに關しては、西欧の伝統においてこの上なく真面目なそして夥しい研究が積み重ねられてきたからです。

樂園（父とともにある）↓アダムという原人間の罪↓樂園追放↓原罪を負って生まれてくる人間たち↓御子の死による贖罪という構図を、少々入れ換えると（隠蔽を修正するための入れ換えです）、原父殺害と去勢不安、そして超自我形成の物語になるとフロイトは考えました。以下は『トーテムとタブー』においてフロイトが述べていることの要約です。

神話的に考えられる原始の状態において、原父が女たちを独占していることに不満を募らせた息子たちは、一致団結して父を殺害し、その肉を食べる。肉を食べることによって父と一体化する。ところが息子たちにとって父は憎悪の対象であると同時に、羨望やあこがれの対象でもあった。すなわち息子たちの父に対する感情はアンビバレンツ（両価性）であった。このアンビバレンツに含まれる愛情の故に息子たちは父を殺したことに悔恨を覚え、罪責感に苦しむ。死んだ父は（息子たちに取り込まれたことによって今や息子たちの内面にその力を移すのだから）生きていた父よりも強くなる。父が生きていた間、父の存在が妨げていたこと（女たちとの性交）を、今や息子たちは自分で禁止する。

この原父殺害以後、部族は父の代理であるトーテムに關して、次の二つのタブーを持つようになる。

(1) トーテム動物を殺してはならない。↓父との和解。父との契約。父が自分たちを保護してくれるならば、自分たちも父殺害を反復しない。

(2) トーテムを同じくする女性との性交禁止↓父の女たちへの性交断念。この断念は、息子たち（兄弟）が互いに争わないで協同生活を維持するためという、實際的動機にもよる。

父殺害を、實際の殺人事件と考えるだけでなく、ここでは、感情が問題です。極端に言えば、父を殺そうと思うことだけで父殺害に相当するのです。

去勢不安は、殺害を企てられた父（殺された後は息子の内面に場所を移します）への恐れであり、近親性交の断念という形で現れるのです。

キリスト教におけるイエスの死は、まさしく父殺害の贖いだと、フロイトは言います。息子が死ななければ贖れないほどの罪、それは父殺害にはかならないというわけですから。そして自ら死ぬことによって他の兄弟たちの罪も贖った息子イエスは、それほどの犠牲を払ったからこそ父と同列になる、その証拠に聖餐式のパンとワインは、父ではなくイエスの肉と血の象徴なのです。

しかし、去勢と原罪と同じ水準にあると言っても、日

本はキリスト教文化圏ではないのでびんとこないという人もいるでしょう。一神論を持たない文化において、或いは息子ではない人つまり娘たちには理解不能という苦情がたえません。エディプスだの去勢不安だのは、一神論の文化のもとで男性だけにあてはまる理論なのではないか、エディプスは普遍的に妥当する理論ではないという批判は根強いものです。そして確かに、その批判は文化論としてはあたっています。けれども、文化論で議論すると、日本には何々コンプレクス、インドには何々コンプレクスという話になってしまいます。この種の逸脱（誤解と言っては言い過ぎですから）に対しては、次の指摘によって封鎖することが出来ます。すなわち、エディプスとは、人間が言語活動に入ることによって必然的に失う何物かと関わっているのだという指摘によって、これが、ラカンの「失われた対象」（対象_a）をめぐる理論です。

② 近親相姦の禁止と「失われた対象」。

去勢不安は、近親相姦の禁止をもたらします。ここで、近親相姦の意味を具体的な家族関係でとらえることに、とらわれ過ぎないようにしましょう。さもないと「近親相姦をしてしまいました」という現場の声につかまってしまいますから。ラカンは、近親相姦を、もっぱら「失われた対象」との関連で理解しています。

では「失われた対象」とは何でしょうか。これを説明す

るためには、私たち人間が言語活動することであることをラカンがどのように理解しているのか、説明しなければなりません。言語活動をするようになることは、決してハッピーではないとラカンは考えています。といって、言語以前に戻れるかという点、もちろんそれは不可能です。私たちは皆、気がついたら言語の世界にいたというのが実情なのではないでしょうか。私たちがまだ何もわからない幼い時に、言語活動は勝手に私たちに侵入してきました。突き詰めて考えれば生まれる前から両親などにうわさされ、生まれれば勝手に名前を付けられ、その名で呼ばれて両親の色々な思い（それもまた言語の形成物です）を託されて大きくなったのです。言語活動の世界に生きる私たちは、あらゆる対象を記号の作用を介して捉えます。もちろん「なま」の体験がないわけではありません。けれどもそれをなんらかの意味あるものとして表現しようとする、とたんに「なま」は失われてしまうのです。言語活動に参入したことによって、対象をありのままに、「なま」のままダイレクトに経験することはなくなりました。「失われた対象」とは、人間の欲望の対象が、不可能となった「なま」の現実に求められることを言い表しています。欲望の対象はこのような彼方⁶に求められるのです。同時に、主体の側も「なま」の生命から切り離されて他者から勝手に記号を付けられ、記号作用の中で自らの本質を探すようになります。

このように自分自身も記号となり、記号作用によってしか再び見出されない主体を、ラカンが「斜線を引かれた主体」と呼んでいます。斜線を引かれることは、人間にとって「ありのままの生き方」を失うことなのですが、もちろん、そうならなかったならば、それはそれで悲惨なことです。映画『フランケンシュタイン』の怪物は自分を造ったフランケンシュタインつまり父が、名前さえつけてくれなかったと嘆きます。記号を付けられなければ社会生活への参入は不可能なのです。

要約してみましよう。去勢とは、人間が「なま」の現実から引き離されるという意味においての「切斷」なのです。従って去勢の作用とは、対象の側には「失われた対象」を、主体の側には「斜線を引かれた主体」を生じさせます。

このように言語活動との関連で「去勢」をとらえると、語る存在は全て去勢されているということになります。

③大文字のファルス(Φ)

ファルスとは、Φと大文字でラカンが表記する時、失われた対象を示す記号です。ただし、失われた対象がそこにあるということを示すだけで、それが何なのかを意味するものではありません。大文字のファルス(Φ)とは、シニフィアン(意味するもの)に対応するシニフィエ(意味されるもの)を持たないという、特別なシニフィアンなのです。ファルス(Φ)は確かに、超越的で中心的です。とい

うのも、彼方にある失われた対象の記号なのですし、人間たちのあらゆる言語活動が究極的にはファルスを根源としている、言い換えればあらゆる表現がファルスを示すことになるのですから。けれどもこの大文字のファルスというものが、私たちの言語活動においては記号の織りなす網状組織の「穴」であることにも注意する必要があります。ファルスは、いわば、空虚な中心なのです。

従って、ラカンの大文字のファルスの理論を、ただちに西欧近代の合理主義的理性至上主義と同一視するとしたら、これは間違いです。ではどこから、理性至上主義とファルスが結びつくのでしょうか。私たちは、主体をめぐる次元の違いに注意する必要があります。

④主体をめぐる二つの次元

さきほどフロイト以来精神分析は、人間というものの在り方に次元の区別をしようと試みてきたと、言いました。「私は私である」という自己同一性の次元と、「私は私である」が通用しない次元とを区別して下さい。「私は私である」が通用しない次元とは、「斜線を引かれた主体」の次元にはかなりません⁸⁾。ではこの二つの次元はどのように違うのでしょうか。

「私は私である」という自己同一性が維持される次元においては、人は対象を追いかける時に、自分が何を求めているのかを自覚しています。「私」が対象の設定をまず行

い、そして「私」が求めていくのです。

ところが、具体的対象を追い求めることは、さきほど見てきたように、究極的には「失われた対象」を求めることでした。そして具体的対象を求めつつ、「失われた対象」を求めていたのだと気付く（もっとも、いつも気付くとは限りませんが）時、事態は次のようになっていきます。

「私」というものが最初から成立していたのではなく、何なのかわからない対象に引き寄せられていたという経験が先行している、そして失われた対象に引き寄せられる主体は、引き寄せられることによって、事後的に現れてくる、そのようになっていくのではないのでしょうか。このような事後性は、何かをしてしまった後で、自分はいついどういうつもりだったんだろうと反省する時などに、経験されます。或いは、自分の求めているものが何なのかわからないというもやもやとした感じは、「斜線を引かれた主体」に私たちが気付く時の感じでしょう。何なのかわからないながらも、求め続けているうちに、「（自分は）それを求めている自分だったのだ」という仕方では垣間見えることがあります。「斜線を引かれた主体」はするように私たちに現れます。

また「私は私である」という自己同一的「私」は、当然一定の内容を持っています。「私はしかじかの人間なのだ」という一定の自己像を形作っているものです。このような

自己像の形成には、なんらかの理想像が媒介となっています。理想像とのイメージ的同一視が自己像を作っていくのです。そして自己同一的「私」の立場から、客観的に対象が把握され、論理的に整合的に比較検討され意味付けられます。

ところが、「斜線を引かれた主体」は、失われた対象を追い求める様々な文脈の中で、様々に発見され、様々に位置付けられて現れるのですから、決して自己同一的ではありません。自己同一的「私」が理想の自己像に中心化された在り方であるのに対して、「斜線を引かれた主体」は記号の網の目を絶えず動いていく非中心的な在り方です。

さて、このように、「私は私である」の「私」と「斜線を引かれた主体」を比較してみますと、ひょっとして、前者がベケで後者がマルと聞こえるでしょうか。この二つは、二者択一できるものではないのです。これらは私たち人間の二つの次元です。私たちは前者の次元にあまりにも親しんでいて、この次元から離れることがめったにできません。前者の次元で形作る自己像は、私たちにとって何物にも替えがたく、いとおいしいものなのです。ラカンが後者の次元を時として力説するのは、後者が私たちのふつうの生活感覚からは見落とされるからです。私たちは、「私」の統合性を守り、世界を整合的に説明することに親しみ過ぎています。ですから、後者の次元は、合理的説明のできない経

験として私たちに現れます。

「私は私である」の「私」と「斜線を引かれた主体」の区別、これはラカンの神話でしょうか。それとも心理学と言語学を合体させたラカンの形而上学でしょうか。⁽⁹⁾一つ言えることは、ラカンには、臨床から得た手応えがあったということです。⁽¹⁰⁾分析に来る人々の語ること、症状や幻想や夢などに、ラカンはこの理論の根拠をみているのです。

さて、大詰になってまいりました。ラカン理論が、フェミニズムの男性原理批判とどのように噛み合うのか、まとめていきましょう。

Ⅲ フェミニズムとラカニズム

①ファルスーログス中心主義批判は、実は何に向けられているか。

フェミニズムが批判するファルスーログス中心主義とは、自己同一的な「私」という次元に属するものです。自己同一的「私」という次元の特徴は、何らかの理想像を介して自己統合することでした。フェミニズムが批判するファルスーログス中心主義とは、従って、理想像のところにイメージ的に捉えられたファルスが使われているタイプなのです。しかしこの次元そのものには性差はありません。この次元において作られる理想像イメージが、「男らしさ」や「女らしさ」の区別を持つのみです。もっとも理想像イ

メージへの同一視は、似ている／似ていないの厳しいチェックを伴いますから、異質者排除に傾きがちです。「男らしく」という理想への努力は、同時に「男でない者」の排除を生むのです。理想像イメージを厳密にそして緻密にすればするほど、排除の激しさも増すという仕組みですから、男性たちが一致団結して、過剰に「男らしさ」にこだわる社会では、非男性は大迷惑するということになります。

②非中心的人格とは「斜線を引かれた主体」に相当する。

次に、ファルスーログス中心主義でない在り方として模索される、新しい女性性の可能性とは、ラカン理論においては、「斜線を引かれた主体」のことです。「失われた対象」を追い求めることによって、事後的に、そして記号表現の彩の中に現れる主体は、理性至上主義に凝り固まった「私」に比べて、自由で軽やかに見えます。ただし、先程も言ったように、これは、私たちが通常気付きにくいだけで、人間存在の別の次元なのです。自己同一的「私」の次元を脱却して「斜線を引かれた主体」の次元で解放された生き方をしよう、というほど単純ではありません。そしてこの次元にも性差はないのです。先程も言ったように、語る存在は全て去勢されているのですから。ただし、伝統的に男性たちは、自己同一的な「私」へのこだわりが強いので、斜線を引かれた主体になお一層気付きにくいというこ

とはあるでしょう。けれども、理性至上主義が男性の専売特許ではないのと同様、斜線を引かれた主体も、女性の専売特許ではないのです。

③男性への抗議はどのように表現すれば適切か。

ラカニズムとの比較を考慮して、男性たちへの抗議の表現を工夫してみましょう。どのように表現すれば核心に迫ることができるでしょうか。もっとも、核心に迫ったからといって、相手が素直に反省するとは限りませんが。少なくとも、より追い詰めることはできません。

男性たちは、「ファルスを持つ者」として自分を認知する限りにおいて、「ファルスを持たない者」に対して不安を持つことになります。すなわち、「ファルスを持たない者」は自分たちからファルスを奪回しようと虎視眈々と狙っているという警戒を持つわけです。女性たちが子供や夫の出世などにファルスの等価物を見出すならば、男性たちは安心していられます。しかし、女性たちが社会参加を求めるならば、女性たちは男性たちにとって、自らファルスを持つ者となるうとしている、ということになるのです。もっとも、ファルスとは、今まで説明してきたように、究極的には失われた対象の記号であり、私たち語る存在からは等しく奪われているものなのですが、男性たちは、この去勢を認め受け入れることが、ことのほか困難なようです。男性性器が付いているという現実が、彼らに過剰な理想像

イメージを供給するのでしょうか。「男でなくなってしまうのではないか」という不安が彼らを過剰なまでに「男らしさ」にしがみつかせるのであり、「男らしさ」を維持することにへとへとになりながらも、「立派なファルス・ゲーム」から降りることは並大抵のことではありません。

そこで、「いいかげんに去勢を認めて、女性に対する行き過ぎた警戒を止めてほしい」と、抗議してみましょう。あるいは「語る存在は皆去勢されているのよ。だから立派なファルスになろうなんてがんばらなくていいのよ」と言ってあげましょうか。「男たちよ、あなた方はファルス中心主義者だ」という批判よりも、照準が合ってくるのではないでしうか。しかしおそらく男性たちの心理的抵抗は、去勢という言葉に対して、ファルスという言葉に対してよりも強いでしょう。核心に迫れば迫るほど、説得への道は一層険しくなるのです。戦術的にはむしろ、ジェンダーフリーの運動が一定の効果を上げるでしょう。「男らしさ」のイメージを防衛するために「女らしさ」のイメージが補強されるという力学そのものを変えることはできませんが、理想像のイメージを多面的にすることによって、理想像への過剰なこだわりを解きほぐすことが期待できるからです。ただし、ジェンダーフリーの運動を「本当の女性らしさ」に向けることは賢明ではありません。ジェンダーフリーは、ひとえに男性の病理を和らげるための処方

なのだと思得た方がよさそうです。どっちみち「ジェンダー」とは理想像イメージであり、「自己同一的な私」の次元にあるものです。どれほど素晴らしいイメージを作っても、そのイメージを介して自己同一化したとたん、そのイメージにとらわれることになるでしょう。

おわりに——「男性にとって女性とは症状である」

以上見てきたところからすると、自己同一的な「私」の次元にも、斜線を引かれた主体の次元にも性差はありませんでした。もっぱら（去勢を認めようとしない）男性の病理があぶり出されてきただけです。ここから、私たちは次のような教訓を得ることができるのではないでしょう。

(1) 自己同一的な「私」の次元において、女性たちも、理性的に論理的に成熟した人格形成をめざすこと。理想像イメージを硬直型でなく柔軟・成熟型にすれば、男性のような悪しき理性至上主義には陥らないでしょう。

(2) 男性たちの過剰警戒につきあってあげる。正攻法は戦術としては賢くありません。ジェンダーフリーの運動で男性の硬直した自己同一性を解きほぐすこと。

ただし過剰警戒は男性の側の病理なのですから、またもにつきあい過ぎないことです。女性が自分を被害者という立場に閉じ込めることになるのは、あまりにも残念です。

では女性性そのものの可能性についてはどうでしょうか。ラカンズムにおいて、女性性の問題は、男性と女性の性愛について論じられていきます。ラカンは、社会制度に浸透している男性たちの病理という領域にあまり興味を持たないのです。ラカンの興味は欲望の在り方にあるのですから、これは当然と言えます。

男性が女性を愛し求めるという性愛の関係は、男性が斜線を引かれた主体の場所に来て、女性のもとに失われた対象も求めるという構図で、描かれるでしょう。しかし、斜線を引かれた主体は、対象にダイレクトに到達することができません。幻想を抱くという仕方では、対象に向かうことはできないのです。女性は、男性の幻想に巻き込まれるという仕方、男性との関係を持ちます。「男性にとって、女性（が存在すると思うこと）は症状である」とラカンはどこかで言っています。ここに女性がいる、と思うことさえ、既に幻想に等しいのです。この大学の男性教員の方々は、さぞかしめくるめく幻想の日々を過ごしているらしいでしょう。ここに、女性の生き方を楽しいものにする可能性があります。

幻想に巻き込まれる、これは不可避でしょう。しかし、けちな幻想に閉じ込められるのと、めくるめく幻想で男性を引っ張り回すのでは、おちがいです。幻想に閉じ込められることなく、むしろ幻想を完結させないようにする、

そこに女性ならではの楽しみがあるのではないでしようか。これを、三つ目の教訓にしましょう。まったく、女性に忙しいと言わねばなりません。理性的存在者として男性と対等に活動し、そして男性の病理につきあい、さらに恋愛における楽しみと、三つの課題なのですから。皆さんがどの課題においても大成功をおさめられることをお祈りします。

ありがとうございます。

注

- (1) 作・企画CLAMP。『なかよし』連載中、及びテレビアニメ放映中（一九九五年）。漫画版が講談社から単行本になっている。
- (2) 漫画版とアニメ版ではストーリー展開に違いがある。ここでも殺害実行が三人いっしょなのか三人の中の一人なのかについて強調点の違いあり。
- (3) 講談社刊、絵本『おぼけのバーバパパ』シリーズ。アネット・ト・チゾン、タラス・テイラー作、山下明生訳。
- (4) 富樫義博作。『少年ジャンプ』に連載され、テレビアニメにもなった。集英社から単行本が出ている。
- (5) 佐々木倫子作。『花とゆめ』に連載。白泉社から単行本が出ている。

(6) 彼方、「なま」の現実といった表現で説明したが、ラカンの用語では「現実界 (le réel)」と言われている。

(7) 「私は私である」という自己同一性が成立する次元は、ラカンの用語では想像界 (l'imaginaire) と言われている。

(8) 「斜線を引かれた主体」の次元は、ラカンの用語では象徴界 (le symbolique) と言われている。また、「斜線を引かれた主体」はSという記号で表されている。

(9) ラカンが、言語学者ソシュール、ヤコブソンに学びつつ独自の見解を盛り込んでシニフィアン理論を練り上げたことは、よく知られている。フロイトが初めて着手した大事業、すなわち無意識という精神活動領域のメカニズムを説明するという大事業に、ラカンはシニフィアン理論でもって取り組んだ。ラカンは臨床家であり、分析家の養成（教育分析）にも携わっていた。

(たむら きみえ・龍谷大学・精神分析学/倫理学)

*一九九五年一月一日「総合科目D・女性論」での講演をもとに寄稿いただきました。

『魔法騎士・レイアース』より



『おばけのバーバパパ』より

